

トウリオ・ロベッティ

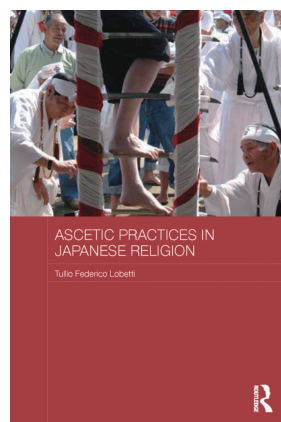
『日本の宗教における修行』

Tullio Federico Lobetti, *Ascetic Practices in Japanese Religion*.

本書はもともとロンドン大学東洋アフリカ研究院（SOAS）の博士論文として書かれたもので、日本の修行の世界を描くすばらしい旅行記になっているが、このテーマは日本の宗教の研究においては周辺の分野であり、まちがいなくもつと学術的関心を呼んでしかるべきテーマである。本書は著者が日本各地の行者に伍して実体験した広範な実地調査をもとに書かれ、三つの主要課題の解明を目指している。その三つとは、一、英語の「asceticism」（求道の禁欲）という言葉が日本の文脈に適用するのが妥当かどうか、二、修行の宗教的・社会的様相、三、日本の修行における共通テーマとは何かである（p.2）。

最初の課題は第一章で論じられる。ここでは人間の身体を幅広い文化的観点から検討し、禁欲を自己否定ととらえる西洋でよく

ウーゴ・デッシ



Routledge, 2014

される理解は、近代の心身二元論から強い影響を受けてきた誤解だと説く。しかし例えば「凛として力強い行者の姿」や「宗教的实践に果たす身体の決定的役割」のような文化的収斂点に焦点を絞れば、「asceticism」という言葉を異言語間に汎用することが可能だと述べている。そして、このような身体を強調する考え方もつて、様々な伝統における行者が単なる「自己中心の人々」であると結論すべきではなく（p.23）、むしろ行者と社会的文脈との相互作用は不安定かつ曖昧なものにとらえるべきだとしている。第二章では禁欲的行為と修行の違いを述べ、修行の三タイプ、すなわち「禁欲行為の借用」、「屋外での修行」、「宗教施設内部での修行」を紹介する。第一のタイプは例えば火渡りや刃渡りのように、祭で行われることが多い。第二の屋外タイプは御嶽山〔木曾〕

の寒行や七尾山〔奈良県吉野〕の行者修行を例として紹介される。

第三のタイプは修験道における羽黒山〔出羽〕「秋の峯入」や曹洞禅の「臘八接心」など、完全に組織化された修行で、「内容が豊かでしたっかり構築された修行体系」になっている。著者は、こういうものが修行の二つの基本要素、すなわち「実践性」と「変化を起こさせる力」という点で禁欲的行為の効率に肯定的インパクトを及ぼすと考えている (p.60)。

第三章では「行者」について論じられる。ここでは俗人の修行と(僧など)職業宗教者の修行を区別し、後者の例として天台宗の「マラソン僧」による有名な比叡山の千日回峰行を挙げている。章の後半では、「なぜ」修行するかに絞られる。これは基本的に何らかの形ある御利益や力の追求をめぐるものであり、人によつて異なる意味を持つ。修行者がこうしたものを求めるのは「自分のためか、あるいは他人のため」であるという (p.88)。

第四章では「修行世界の外部と内部」が表裏一体になっている二重構造を示した上で、日本の修行の空間的・社会的文脈を探究する (p.92)。この章の後半では神道と仏教それぞれにおける修行の比較分析が行われる。「禁欲的行為は必ずしも宗教教義の直接的表現ではなく、宗教的意味の充当と修行実践を通じて生じる身体解釈は異なる地平に属するという著者の議論は説得力がある (p.116)。

最終章第五章では修行における「不変」に焦点が当てられる。

「不変」とは、身体、一定の苦痛と肉体的疲労を意図的に作り出すこととそれに耐えること、修行から生ずる感覚をどうとらえるかという身体解釈論の三つを指す (p.119)。この身体感覚は「喪失」と「獲得」という面から修行者が会得するものであり、不純から純粋へ向かい、最終的理想である「完璧な身体」を感じ取るプロセスを可能にするものだ。著者の言う如く、痛みは修行者を最終的に「死に至らしめ」てくれる「鍛える力」として機能する。こうして修行者は「生の中の死」を経験し、究極のパラドクスを現実させようとする。その例が、日本の宗教伝統における「即身仏」である (pp.126,131)。これらの結論から著者は、修行とは「修行者の身体内の流れを逆行させ、結果として力の生成を獲得する明白で構造的なプロセス」という新しい定義を加えた (p.136)。

字数の限られた短い書評で本書の豊かさを正しく評価するのは難しい。著者は自ら荒行にいくつか参加してその分析をまとめているが、そうした「極限の」フィールドワークを通じて集めた調査データの持つ価値、および曖昧になりがちな宗教現象を明確化するための注意深い類型化の双方の点から、本書は推奨に値する。その上で、いくつかの細かい点について批判めいたことを述べさせてもらいたい。一、題名にある「日本の宗教」という言葉からは、日本に「統一された」宗教があるかのようなニュアンスを感

じてしまうが、これは日本という文脈において、たくさんの方の宗教形態が存在する事実と矛盾する。二、感謝という考え方が日本の修行 (pp. 86-87) および文化一般と関連しているなら、もう少しその点を深掘りしてよいような気がする。三、本書はいささか唐突な終わり方をするが、結論を含め、あと数頁の書き足しがあれば、もっと読者に納得しやすいものになったのではないか。四、著者自身も自覚しているようだが (p. 120)、著者の「人間学」的な説明力が充分発揮されていない点が多少ある。こうした若干の留保点を除けば、本書は日本的禁欲や修行一般について新たに加えるに値する文献であり、日本の宗教および比較宗教学の分野の研究、上級の学生にとって極めて貴重な文献となろう。

(翻訳：朝倉和子 翻訳家 (SWET所属))

*本稿は *Japan Review* 31 (2017) に掲載された英文テキストの日本語訳である。